小さな努力の積み重ねが大きな自信に

初心者から熟練者まで人に仕える音楽団体（コレギウム）

吹 奏 楽 部

St. Michael's Collegium

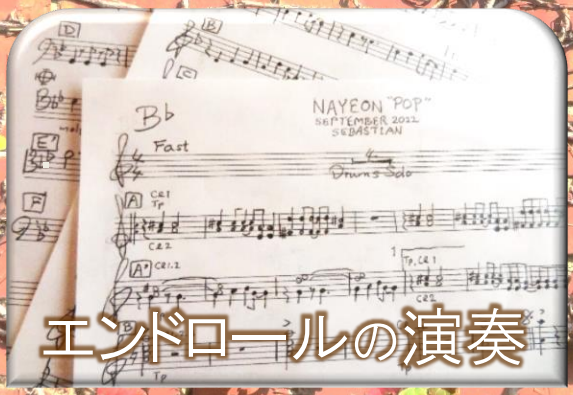
写真をタップ/クリックすると演奏が視聴できます

サヨナラ勝利の演奏

野球応援曲全集

名物トランペット

聖歌演奏･概要欄も



エンドロールの演奏

バッハからアニソンまで

演奏活動の写真

甲子園関連の写真

第89回選抜高等学校野球大会から甲子園のたびに友情応援に響力してくださっている啓明学院さんにハレルヤ感謝！！

第９９回全国高等学校野球選手権大会
キャッチフレーズは本校 宇陽大空（うようそら） 君（文理特進・サッカー部・応募当時１年生）作「じぶん史上、最高の夏」

第９３回全国高等学校野球選手権大会（啓明学院チャペルにてセンバツで使用する楽曲を収録）

第１０３回全国高等学校野球選手権大会（詳細は次のページで報告）

3/6・次頁：チャペルニュースでの甲子園報告

高等学校硬式野球部と吹奏楽部の甲子園報告

学院チャペル委員 / 吹奏楽部顧問
セバスチャン大和慎吾

高等学校硬式野球部（以下「野球部」）が、4年ぶり3度目の夏の甲子園（第103回全国高等学校野球選手権大会）出場を果たし、ベスト8という成績を残した。野球部の活躍ぶり、選手個々人のストーリー、各試合の様子などは新聞やネットニュース、テレビ放送の映像等で無数に紹介されている。「神戸国際大付」と検索するだけで、今大会の情報が数多くヒットするのだ。そういった内容については、それらを参照されたい。

ここでは、吹奏楽による応援演奏（以下「野球応援」）をする側からの視点で、ご報告申し上げたい。甲子園への道のり、期間中の活動、その後の3点である。

本題に入る前に、（特に本校の）野球応援は、選手を後押しする勝利への祈りだけでなく、すべてを導いてくださる神への讃美と感謝であることを申し上げておきたい。モンテヴェルディやベートーヴェン、中でも特にバッハの礼拝音楽から多くを学んでいる私が申し上げるなら野球応援はまさに礼拝なのである。

例えばバッハのカンタータというジャンルの作品群は、奏者の技量を披露するには甚だ不向きな曲。礼拝の必要性に従って作曲されていて、30分ほどの1曲の中で、世紀のオーケストラに大合唱団がいても、出番は最初と最後のコラール程度。超有名なソロトランペッターがいても、そのわずかなコラール中で所々ファンファーレを吹くか、途中のアリアで5分ほど歌手と共演する程度。しかしそれらが集まって、聖書のメッセージをリアルに味わい、みんなでひとつの礼拝を作り、神を讃美するのだ。

野球応援も、演奏を披露するには必ずしも向いているとはいえない。どんなに練習してこだわって演奏する曲があっても、その編成がビッグバンドであったとしても、3アウトでたちまち演奏停止となる。しかし、だからこそ、実際に目の前で繰り広げられる場面から来る必要性に迫られた、生きた音楽が生まれるのだ。ただ演奏したいという思いからではなく、人に仕える中で生まれてくる音楽だからこそ、生命力が与えられる。本校のプロレス音楽やチャンステーマには、和声進行に乗ったアドリブやアレンジとして、グレゴリオ聖歌やバッハの作品等へのオマージュが含まれる。

1. 甲子園への長く曲がりくねった道

いよいよ本題である。甲子園を語るには、そこへ至る道のりも外せない。

今年、野球部は圧倒的に強かった。地方予選の多くをコールドで勝ち上がってきた。応援していて、緊張する場面はあっても、負ける心配をすることはなかった。だが、その応援演奏となると、さまざまな困難が立ちはだかった。コロナ禍で野球応援の可否が各地方高野連に委ねられた中、兵庫県では演奏禁止となった。

吹奏楽部は3年生１人、２年生３人、１年生２人に、「指揮者と奏者の二刀流」（神戸新聞）を務める私の7人体制だが、2年生以下は、一度もスタンドで野球応援をしたことがなかった。本番を経験しないまま甲子園を迎えたら、合同演奏をお願いする啓明学院さんに示しがつかない。そう考えた一同は、音楽室で試合を想定した練習を始めた。

私が音楽室の黒板にダイヤモンドやスコアボードを書き込み、日ごとにテーマを決めて音楽を合わせる練習をしたのだ。例えばボールカウントと出塁について。2ストライクからバッターがファウルで粘っている。武藤敬司入場「ホールドアウト」に続き中邑真輔入場「サブコンシャス」の演奏、まだまだ継続。野球部監督推薦のプロレス音楽の数々。デッドボール。ヒットの演奏なくチャンステーマ「Go! Go! 国際」へ。

日を重ね、初戦前の最後の練習はサヨナラ勝利について。2点ビハインドで迎えた9回裏のサヨナラ勝利をイメージ。チャンステーマの三沢光晴入場「スパルタン X」と「ヒットのファンファーレ」が響きまくる。サヨナラ。広い音楽室、ソーシャルディスタンスは十分だ。勝利の歓喜を思い浮かべながら、私のピアノ奏楽で、みんなで校歌を歌った（マスクは着用）。

そうしているうちに、兵庫県では録音音源の使用が認められた。今の「7人体制」のメンバーで、全20曲を収録した。各曲2分前後、番号を付けて私のスマホに保存した。部員で私のスマホと規格が同じである人にも、バックアップとして持っておいてもらった。

これら 20 曲と、一部過去の音源を加えたメドレー編が、私たちで公開した神戸国際大附ブラバン野球応援2021・夏の兵庫県大会 (Baseball Music by St. Michael's Collegium 2021) - YouTube で視聴可能。

甲子園を懸けた熱い戦いが始まった。野球部でレンタルした屋外用音響機材を、朝一から球場に乗り付ける私のハイエースに乗せ、スタンドに持ち込んだ。レンタルのために、試合ごとに野球部の副部長が三宮付近のレンタル屋さんへ往復した。それを駆動する発電機は、軟式野球部からお借りすることができた（軽音楽部も相談等、ありがとうございます！）。

吹奏楽部員は、試合ごとに球場に集まり、私のハイエースから楽器ならぬ音響機材を降ろし、スタンドでセッティングした。試合中は、音響機材に接続したスマホを、私が試合の展開に合わせて操作する演奏に乗って、野球部たちと一緒に手拍子で応援した。もちろん、野球部で病気療養中の選手への応援メッセージが書かれた、うちわを共有したのは言うまでもない。彼は私の英語の授業の担当生徒でもある。

甲子園での生演奏許可が発表されたのは、決勝戦前日。私が知らせる前に、部員たちもニュースで知っていた。決勝戦当日、部員たちは「野球部に勝ってもらって、絶対甲子園で演奏しよう」と励まし合った。

決勝戦は一般生徒も応援に加勢、そして優勝。その瞬間、甲子園では長年合同演奏に協力してくださっている啓明学院吹奏楽部の先生から、春夏の連覇おめでとうございます、合同演奏喜んでとのメールをいただいた。啓明さんとは、毎年、甲子園が決まりそうな時点で、決まった時の場合に備えてコミュニケーションだけは絶やさないようにしている。

4/6・次頁へ続く

2. 待たされた甲子園、離れても心はひとつ

吹奏楽部の士気は高まる。「甲子園の舞台に立てるのは野球部のおかげなので恩返しを（クラリネット・キャプテン）」「野球部への気持ちは一番だということを他の高校に見せつける（トランペット）」「（その姉）野球部には感謝しかなく、応援曲がプロレスという個性を楽しむ（フルート）」「不安もあるがしっかり響かせたい（トロンボーン）」

啓明学院さんとの合同演奏に向けて、先方の音楽室で合同練習を行なった。スケジュールの関係でたった1回、2時間。曲の練習から試合想定までを2時間に収めるための練習メニューを予めメール添付の書面でお送りしておいたので、練習は順調に進んだ。

続く悪天候のため遅れに遅れて迎えた初戦は、全校応援。3度目の北海戦で3度とも勝たせていただいた。9回の攻撃時は、新聞等であまりにも有名な卒業生と、今年高校を卒業し川重に就職した卒業生のダブルトランペットで「必殺仕事人」のテーマが演奏された。続いて力を込めるドラマーはその弟、パーカッショニスト。感染拡大防止のため、奏者上限50名、演奏姿勢は常に正面を向いて着席との制限があった。私は指揮に専念、存分に暴れた。

2回戦・高川（山口）戦からは感染拡大のため、吹奏楽部も一般生徒も入場禁止になった。応援にはセンバツの時の啓明さんとの合同収録を用いた。甲子園では音響操作がすべて球場係員なので、県大会で私がしていたような展開に合わせたリアルな表現は不可能だが、啓明さんとの迫力の音色は響いた。

部員たちは「1回戦で応援しているからこそ怒りや悲しみは大きい（前述フルート）」と涙をこぼしつつも、「こればかりは仕方ない（トランペット）」と潔く退（ひ）いた。当日の朝、野球部と教員有志だけで甲子園球場前に集合していたら、仕事人のトランペッター（演奏の際は野球部のユニフォームを着用）が普段着姿で登場「家すぐそこなのでグッズだけ買いに来ました！　家で仕事人吹きます！」とカラカラっと笑って爽やかな空気だけを残して立ち去られた。

3回戦は長崎商業を相手に点の取り合いとなった。圧倒的に強かった野球部としては、この夏初めての、劇的なサヨナラ勝利。スタンドには療養からリハビリ中の選手親子の姿もあった。歓喜が大きいからこそ、それを吹奏楽部の生演奏とともに部員と現地で共有できない悔しさもまた、大きいのだ。仕事人のトランペッターは銀傘下のライナービジョンに応援メッセージを届けてくだり、試合後は野球部のユニフォームを着て球場前へ祝福に来てくださった。部員たちは各家庭のテレビの前で、演奏するはずだった曲を歌いながら応援した。

近江相手の準々決勝では、今大会一の名場面と称えられた、4点を追う9回表、2アウト・ランナー無しから選び取ったフォアボールに続く代打・猛打で同点に追いつくドラマが見られた。敗れはしたが、胸を張って甲子園を去ることが出来た。

あとの1点は吹奏楽部の分と思うことにしよう。録音ではなく、常に正面を向いて着席して演奏でもなく、全員立って身を乗り出して、私もトロンボーンのハイトーンのアドリブで、プロレスの和声進行に乗せてクラシックをハモらせてガンガン攻めまくる、いつもの技を繰り出していれば、あるいは勝てていたかもしれない。このあたりのアドリブやアレンジについては、前述の YouTube をお聞きになり説明欄をご覧になった、毎日新聞さんが関心を持たれ、一連の記事でも吹奏楽部を丁寧に取り扱ってくださった。

3. 吹奏楽部は甲子園を去ったが、その後も

実は、1回戦での演奏を終えた後、啓明さんがインスタグラムで応援メッセージを発信してくださっていた。前述「Go! Go! 国際」「スパルタン X」に加え、本学院理事長が立教新座高校（本学院と同じ聖公会）チャプレン時代に親しんでいた関係で私が編曲した「突撃タンク」を演奏し、準々決勝の日までに数日に分けて、音楽室から届けてくださった。4点差を埋めた底力はそのおかげだったのだ。野球部からは感謝の動画メッセージが。神戸新聞さんや毎日新聞さんが、大会後も続く地域交流として関心を持たれている。

今夏の甲子園では、吹奏楽関係以外にも、入場が叶わなかった方々が多くおられる。度重なる順延のため、遠方からの応援体制が滞在しきれず反転、泣く泣く帰途に就いた学校もある。多くの苦難の中で実現した甲子園、それでも支えてくださった方々と、勇気と感動をくれた野球部、すべてを導かれる神への感謝の意を表明するには、黙示録5章から採られた、以下の歌をお送りして拙稿を結びたい。

Das Lamm, das erwürget ist, ist würdig zu nehmen Kraft und Reichtum und Weisheit und Stärke und Ehre und Preis und Lob. Lob und Ehre und Preis und Gewalt sei unserm Gott von Ewigkeit zu Ewigkeit. Amen, alleluja!

Kantate 21, *Ich Hatte Viel Bekümmernis*,
Johann Sebastian Bach

屠られたまいし小羊こそ、力と富と知恵と勢威（いきおい）と栄光と誉れと讃美とを受くるにふさわしけれ。讃美と栄光と誉れと権力（ちから）われらの神に永遠（とこしえ）から永遠まであらんことを。アーメン、ハレルヤ！

カンタータ 21 番「わがうちに憂いは満ちぬ」
ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（杉山好（よしむ）訳）

いまや汝らの神の報復はいみじくも遂げられたり

学院チャペル委員　セバスチャン大和慎吾

穏やかではない書き出しで恐縮。聖書は「霊を相手にする」戦いと念押し（エフェソ 6:12）。報復を目的とする戦争を正当化するものではありませんので、ご安心を。

冒頭のタイトルは、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（Johann Sebastian Bach, 1685-1750）作曲『クリスマス・オラトリオ』（Christmas Oratorio; 原語のドイツ語でWeihnachts-Oratorium（ヴァイナハツ オラトリウム））より終曲の歌詞です。『クリスマス・オラトリオ』というのは、6曲のカンタータ（1曲あたり約 30 分）の集まりの総称で、全体の演奏時間は約３時間。カンタータとは管弦楽と声楽から成る教会音楽の一種で、レチタティーヴォという、歌というよりはメロディーの付いた語りといった聖書朗読あるいは自由詩、個人の思いを歌うアリア、会衆としての賛美である合唱（多くはルター派のコラール）という層が重なって出来上がっています。

簡単に言えば、『クリスマス・オラトリオ』は「6部構成の３時間くらいの曲」と思てってください。私の手元にある楽譜は 300 ページ強、ちょっとした単行本です。主イエス降誕物語ですので、ルカやマタイによる福音書に基づいて曲が進みます。「第１部」は降誕節第１祝日（いわゆる 12 月 25 日）用で住民登録から降誕まで、「第２部」は降誕節第２祝日用で降誕が羊飼いに知らされる場面とみ使いの賛美、「第３部」は降誕節第３祝日用で、羊飼いが乳飲み子イエスを探し当てて喜んで帰っていく場面、「第４部」は元旦用で、キリストの割礼と命名、「第５部」は新年最初の日曜日用で、東方の博士が幼子イエスを探しに来た場面とヘロデ王の動揺、「第６部」は１月６日の顕現日用で、ヘロデ王の偽の礼拝予告と博士たちの捧げもの及び勝利宣言という内容です。これらのことがオーケストラの演奏とともに合唱・レチタティーヴォ・アリア・コラールという多重な層によって繰り広げられます。

私自身、実際に「第 1 部」に含まれる５分ほどのアリアを演奏したことがあります。2018 年の高校クリスマス礼拝（神戸聖ミカエル教会）で、お話の担当だった司祭からお話の冒頭で何か演奏をと、場をいただきました。そこで、同アリアの通奏低音を司祭の奥さん（当時神戸教区パイプオルガン委員長）に弾いていただき、トランペットによる前奏や間奏を私がトロンボーンで演奏し、バスの歌は私がトロンボーンを抱えたままドイツ語で歌いました。聴いてくれたのがクラス担任や教科担当（英語）及び吹奏楽部で３年間ともに歩んだ 55 回生（演奏当時２年生。１年生の夏には一緒に甲子園に行った！）だったこともあり、このオラトリオは思い入れの深い曲となりました。

なにせ３時間の曲ですので、現時点で私の理解が及んでいる（つもりの）わずかな部分だけでも、話は尽きません。いろいろなことはまたの機会があればお分かちしたいと思います。

今回お分かちするのは、今の世の中にぴったりの箇所で、「第６部」の終曲で演奏時間は約４分。

まず印象的なのは、オーケストラとともに響く、トランペットのファンファーレ。実は、これは本校吹奏楽部の野球応援にも採り入れています。プロレス曲が多いことで有名な本校の応援演奏ですが、主旋律にハモる裏旋律として部員の技量に応じたアレンジを適宜バージョンアップさせています。例えば神戸国際大附シートノック【２０１９夏/兵庫大会・準々決勝】 - YouTube の 3 分 57 秒付近で、主旋律を通り越して高い「ソ」からさらに上に向かって「ソ・ドレミレド～」と響くのが、それです（実際は変ロ長調）。部員たちがしっかりメロディーを吹けているな、と認めた私が、通常はトロンボーンでは用いない（無理をすれば唇が切れる危険のある）超高音域で繰り出す技。試合で「ここぞ」という場面で行なっています。部員たちも、稽古の中で日々技を磨いています。

話を戻しましょう。このオラトリオ終曲でも、トランペットは危険な超高音域で「ソ・ドレミレド～」のファンファーレ（実際はニ長調；バロック時代のトランペット/ホルン奏者が超高音域を用いざるをえなかった事情については、それだけで１つの記事になるので、関心のある方は「自然倍音列」「金管楽器の歴史」等で調べてみてください）。このファンファーレに乗って歌われる合唱の出だしはこうです。

Nun seid ihr wohl gerochen（ヌン ザイト イア ヴォール ゲロッヘン）
An eurer Feinde Schar（アン オイレア ファインデ シャー(ル)）
いまや汝らの神の報復はいみじくも遂げられたり
汝らを苦しめ悩ましたる敵どもの上に(杉山好（よしむ）訳)

敵とは霊的な悪、つまり悪魔です。いろいろな聖職者が、COVID-19 の蔓延を人と人のつながりを引き裂こうとする悪魔の働きであると語っています。今こそ報復を遂げられたキリストの力を頼りつつ行動する時です。ではどのようにして、キリストは報復を遂げられたのでしょうか？

ちょっと音楽の知識がある方なら、このファンファーレに乗った勝利の合唱のメロディーに度肝を抜かれることでしょう。なんと、バッハがあの『マタイ受難曲』の中で何度も用いた受難のコラール。キリストは十字架で死んでよみがえるために生まれた、それが私たちの罪・悪魔への勝利なのです。アーメン、バッハはファンファーレに乗せて「クリスマスと十字架は一体である」というメッセージを強烈に残したのでした。

最後に、クラシック音楽といえば「誰の指揮で聴くか」が常に話題の中心。自らオルガン/チェンバロを弾く指揮者２人を紹介します。故カール・リヒター氏は 1960 年台に現代楽器でバッハ演奏の頂点を極めた人。天国のバッハが「こんな音が欲しかった！」と絶賛していること間違いなし。鈴木雅明氏は古楽器を再現、松蔭の大学チャペルで多数録音。天国のバッハが今度は「私が地上にいた当時の音だ」と絶賛していること間違いなし。これぞ超教派：作曲者はルター派、指揮者は改革派、録音場所は聖公会。